■肢体不自由のある子どもたち･知的障害のある子どもたちへの実践事例

学びのきっかけになる読書活動の実践

神奈川県横浜市立若葉台特別支援学校
司書教諭　関戸　優紀子

はじめに

本校は、2013年１月に横浜市緑区新（にい）治（はる）町から移転し、横浜市立若葉台特別支援学校（横浜わかば学園）として開校しました。同年４月に、それまでの30年の歴史ある肢体不自由教育部門（Ａ部門）に加えて、知的障害教育部門高等部（Ｂ部門）を開設し、横浜市立では異なる障害種を設置する初の併置校となりました。

横浜市立特別支援学校唯一、Ａ・Ｂ部門をもち、さらに校内にコミュニティハウス、カフェのある本校の特徴を活かした教育活動を進めています。

私の所属するＡ部門中学部では、授業で育てたシソ、バジル、サツマイモなどを、Ｂ部門のパン工房へ納品するコラボ授業を実施しています。パン工房のパンはカフェでも売られ、地域の方にも購入していただいています。

本校の学校教育目標「一人ひとりを大切にした教育を行い、地域とともに歩み、自立と社会参加を目指す教育を充実させます」とあるように、Ａ・Ｂ部門、それぞれの特性や児童生徒の教育的ニーズに応じた学びを保護者、若葉台地域、福祉・医療関係者、学校運営協議会などさまざまな関係機関と連携し、充実した学校生活を目指しています。

横浜市では各学校に学校司書が配置されているので、子どもたちの読書活動面では、本校でも学校司書が担任と連携を図りながら、Ａ・Ｂ部門すべての子どもたちの読書活動を支援しています。また、本校はＢ部門図書委員会による読み聞かせや朗読劇を通したＡ部門との交流活動が認められ、文部科学省令和２年度読書活動優秀実践校として表彰されました。コロナ禍でも、読み聞かせの映像配信など工夫をこらした読書活動の交流を行っています。

活用事例

〈 中学部３年女子Ａ 〉

学習意欲が高く、ひらがなが読めます。発語もありますが、発音が不明瞭のため、サインや手話、コミュニケーションカードを用いながらコミュニケーションをとっています。性格はと

ても真面目で、人や物への興味・関心が高いです。内言語が豊かで、自分の思っていることを何とか人に伝えようとする気持ちをしっかりと持っています。その反面、なかなか伝わらないと、伝えることをあきめてしまったり、自分の意図しないことに同意してしまったりすることがあります。

昨年度は、『はじめてのおつかい』、『なぞなぞのみせ』、『あいうえおにぎり』を、発音練習やコミュニケーションにつながる学習の教材として活用し、伝わる経験を積み、日常生活の自信につなげていきました。

今年度は、主体的に自分がどうしたいかを意識させ、学校生活全体を通して自立に向けてさまざまな取り組みを行っています。かかわりの浅い関係の人とも円滑にコミュニケーションをとることや、支援依頼ができること、身辺自立の更なる獲得を目指しています。

身辺自立については、身体や髪の毛を洗うことの練習をしています。自分の体調管理も含めて、自分の身体に向き合う学習にも継続して取り組んでいます。『みんなうんち』や『むしばくんだいすき？』を教材に使用しました。『みんなうんち』では、便座で成功体験を積み重ねているＡさんと日々確認している事柄に気づくページがあります。そのページで再生を止め、Ａさんと確認をします。

いまでは、家庭でも便座での排泄が増えてきました。『みんなうんち』も『むしばくんだいすき？』も自分の体調管理を自分自身でどのようにすべきかに気づくことのできる教材となりました。

昨年度に引き続き、今年度も本読みに合わせて手話で表現をしながら読み進める学習も積んでいます。手話をしながら読み進めることで、以前より集中して読むことができています。手話の語彙数も増えてきました。

〈 中学部１～３年生 〉

クラスの小集団の学習の教材として『みいつけた』を使用しました。まず、『みいつけた』を教室の大型テレビに映しました。簡単な内容の言葉のリズムも心地よく「みいつけた！」の繰り返し言葉が出てくる絵本です。本読みを終えた後、みいつけた遊びをしました。最初は生徒全員が廊下に出て、教員がぬいぐるみを教室内に隠しました。

「もういいかい？」「まーだだよ」のやりとりをしながら取り組みました。見事、ぬいぐるみを見つけた生徒が今度は隠し、他の生徒が見つけて、ということを繰り返し行いました。かくれんぼの遊びをしたことがない肢体不自由の生徒は多くいます。かくれんぼとは違いますが、対象物を探して見つけたときの生徒からは、とても素敵な笑顔が見られました。本を通して遊びの体験ができました。

〈 小学部２年女子B 〉

全盲で右耳難聴の障害があります。認知面では聴覚、触覚、嗅覚等で、周囲の状況を理解することができます。反面、周囲の状況が把握できないときは、不安から全身に緊張が入ることがあります。好きなキーワードに笑顔を見せます。

読書はおもに課題学習と昼休みに取り組みました。決まった時間や場面に取り組むことによって、見通しをもちやすくなり、何をする時間かわからずに不安になることが減りました。自己刺激である身体の動きも、iPadでのわいわい文庫による読書が始まると、身体の動きがぴたっと止まりました。外界の世界に気持ちが向く瞬間です。もともと読書の好きなＢさんですが、わいわい文庫の700冊近い文庫から、今まで読んだことのない、さまざまなジャンルの本を手軽に読むことができ、読書の世界を広げています。

おわりに

肢体に不自由があり、重度重複障害のある子どもたちが多く通う本校では、さまざまな姿勢や場面でも気軽に読むことができるiPadを使用した読書活動は、有効な学習の一つになります。もちろん読み手と聞き手のやりとりのライブ感は、紙媒体の本のほうがあると感じます。本をめくる動作や、紙の匂いなどがわくわく感を高めます。

今回の事例にあるように、iPadのわいわい文庫の中でページがめくられ音声が出ることで、教員は生徒の一瞬見せる表情や発した言葉、ジェスチャーを見逃さずにすみます。また、手話を教える際もスムーズに教えることができます。

そして、コロナ禍であるいま、手軽に消毒ができるiPadの使用は、感染症に配慮を要する子どもたちが多い本校

では大変有効であると感じます。

本校ではわいわい文庫専用のiPad 3台を活用しています。一人1台端末になったいまでも、わいわい文庫専用のiPadがあることで、そのiPadを貸してもらえた嬉しさをAさんが教員に伝えることがありました。

読書は想像力が豊かになり、実体験につなげていくこと、もしくは実体験を思い出すこともできるので、子どもたちの学習に必要なものだと考えます。ひとりで読むことが困難な子どもたちも、日常の中で当たり前のように、自分の好きな時間に読みたいタイミングで読書をすることができたらすばらしいと思います。

今年度は、学校司書にわいわい文庫のiPadを1台預け、B部門の生徒も気軽に図書室で読めるようにしています。スペースに限りのある図書室内ですが、もっと落ち着いてわいわい文庫が楽しめるようなブースを作る計画を練っているところです。本校の多くの子どもたちにも、わいわい文庫での読書を楽しんでほしいと思います。

700冊近い本には、昔から親しまれているベストセラーから、マニアックなもの、タイムリーな話題の物を取り入れ、本読みの音声にも変化を講じるなど、伊藤忠記念財団の工夫を感じます。長年この事業を続け、たくさんの意見を取り入れてくださり、感謝いたしております。

これからも子どもたちの学習意欲や余暇の広がりのために、私自身も活用方法を工夫して、多くの子どもたちの読書活動の一助になるようにしていきたいと思います。